

～ All for one, One for all. ～

光の家

LIGHT HOUSE WITH THE BLIND

視覚障害者総合福祉施設
東京光の家会報

— 141 号 —

2007 年 1 月 1 日発行

愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。彼らは腐れはて、憎むべき事をなし、善を行う者はない。
主は天から人の子らを見おろして、賢い者、神をたずね求める者があるかないかを見られた。彼らはみな迷い、みなひとしく腐れた。善を行う者はない、ひとりもない。
すべて悪を行う者は悟りがないのか。彼らは物食うようにわが民をくらい、また主を呼ぶことをしない。

詩篇第一四篇 一節～四節

謹
賀
新
年



正秋バンド関係者と恵泉女学園大学聖歌隊メンバー

あけまして
おめでとう
ございます

皆様には佳き新春をお迎えのことと存じます。旧年中は当法人福祉事業のために格別なるご厚情を賜りましてありがとうございます。お陰を持ちまして二二〇余の施設利用者は、障害の重荷にも負けずに、日常の諸訓練や文化活動等に積極的に参加し、一年を過ごすことができました。又、「光の家障害者自立支援センター（仮称）」の建築も着工の運びとなり、三月には完成する予定です。

私どもは、この一年も社会の負託に誠実に応えるべく精一杯励む所存です。何卒本年も引き続いてご指導・鞭撻の程お願い申し上げます。

平成一九年 元旦

社会福祉法人 東京光の家
役・職員一同

巻頭言 昨今の福祉施設

「収容から利用施設へと変貌した」
社会福祉法人東京光の理事長 田中亮治



(1)

新しい年を迎え、何となく気持ちの高ぶりを感じる。今年はどうなる年になるだろうか。世の中が落ち着き、平和な社会になるのか、それとも、依然として様々な悲惨な事件が発生し、人々の心を暗くするのか、等々。それでも、新しい年には新しい希望と夢が芽生えてくるから不思議でもあり、幸せなことでもある。ただ人の一生には平坦な道もあれば、どういふ訳か山もあれば谷もある。この三つの要素で人生が織り成されているようであ

る。そんな次第で、この新しい年も、この三つの要素（平坦、山、谷）が交互に押し寄せてくるだろうと覚悟しているところである。

ところで、私にとって目下の関心事は、私個人がどうなるかは、極めて小さくある。何と言っても、最大の関心事は「福祉施設政策」が具体的にどのように推移するかである。福祉施設解体の道突っ走るのか、それとも、地域福祉（在宅福祉も含めて）と施設福祉は車の両輪の関係にあるので、この両者のバランスを考慮された政策をとるのか、私が如き者に計り知る由もないが、社会福祉の歴史に禍根を残すようなことだけは避けてほしいものである。福祉サ

ービスの利用者とそのご家族の方々、そして社会福祉の仕事に汗と涙を流し、国家・社会のために働いている関係者の切なる心の願いを無にしない政策をとってもらいたいものだ。

社会福祉の多くの先達は、想像を絶するような苦難を乗り越えながら、障害や貧困の故に社会で苦しんでいる人々への愛に動かされて福祉施設を創設してきた。このことは、社会福祉の歴史に栄誉ある頁として遺されることであろう。それを引き継いでいる私も又、これらの先達の方々の偉業に対し、満腔の謝意をもつて称えるものである。

(2)

しかし、このような偉業によって創設された福祉施設と雖も神ならぬ人間の手によってつくられたものである。故に、有限な人間に欠点や至らぬ面がある如く、これら福祉施設にも欠点があり、改善すべき点のあることを否定できない。だからと言って、

会報 五言

一、いじめによる自殺が多発。その処方箋は？ 様々な議論盛んなり。すべて空を打つようで空しく響く。

一、弱い人をいじめたり、数の力をたのんで特定の人をいじめる行為は、人として最低のことであり、最高の卑劣な事だと教える以外にない。

一、いじめを無くする方法。いじめに合ったら戦って勝つか、平然として無視するか、両者共に難しいが有効な道。

一、「障害者自立支援法」、その名は善し。が、どうしてこんなにも不評なのか。
一、この法に何かが欠けている。それは「愛」と「惻隱の情」なり。しかし、何事も真理にしたがえば力がある（聖書）。

止むを得ないことだと弁解するものではないが、この欠点は人間がつくり出すあらゆる組織・国家等に付着しているものでもある。もしも、福祉施設の持つ欠点が、他の如何なる組織体よりひどいものだとして認定し、それが故に「施設解体」をするのだとしたら、由々しきことである。ともあれ、福祉施設は大きく変わった。その変化とは、首題にあるように、「収容というイメージが消え、自由選択による『利用施設』になった」ことである。もはや「収容施設」ではなくなった。そして、決して特別な場所ではなく、地域生活そのものの一部である。しかも、地域福祉の重要な一資源として活用できる生活の場でもある。普通の生活が営まれている場である。全く普通の生活がある処である。福祉文化が立派に定着しており、一般地域との交流も盛んで、小・中学校の総合学習の実践の場となり、福祉教育の発信の場でもある。

このように、福祉施設は三〇年前、二〇年前の時代とは、比較にならない程に、中広い社会的進化を遂げつつあるのである。しかも、この社会的進化の裏には、前述したようにこの世界の偉大なる先達の方々の燃えるような人間愛に基づく情熱と愛労とが刻みつけられているのである。これは、まさに大なる社会的遺産ではないだろうか。しかし、貴い大なる社会的遺産だと受けとめるから、関係者は必死になって、その運営に心血を注ぐのである。制度上、与えられた運営条件がどんなに厳しくあっても、お年寄りや障害を持つ人たちの命と生活を守るため、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして」社会福祉の使命感を貫くべく歩いているのである。

何はともあれ、今年も皆様にとって、佳きお年でありますように。又、変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。



知子夫人とエルサレム巡礼の旅にて

東京光の家を訪ねて

桜美林大学 教授 小森 禎司

二〇〇五年三月一七日（日）、私は、パートナー小森知子とともに東京光の家を訪れた。私たちにとって、初めての訪問だった。

内村門下の一人であった秋元梅吉氏によって創設された、東京光の家の名前を私が初めて耳にしたのは一九五四年の夏、当時、栃木盲学校の生徒だった私が、恩師鈴木彪平先生に連れられて、東京都武蔵小金井の浴恩館で開かれた日本盲人キリスト教伝道協議会の夏季修養会に参加したときのことだった。二泊三日の修養会でどんなメッセージが伝えられたのか、何も覚えていないが、まだ冷房のなかった会場のうだるような暑さと参加者の熱気と幼児のように語る秋元先生の声は今も鮮明に記憶に残っている。あれから既に五〇年の月日が経っているとはとても信じられない。

この度の訪問は、光の家で毎週日曜日に開かれている聖書集会の講師をしておられる相澤忠一先生の計らいによって、園生たちにメッセージを伝えるため



一同で讃美歌を歌う

だった。開会五分前、会場に案内された。弱視の園生が「おはようございます」と声をかけてきた。二〇〇人余の園生の七割が参加する会場は活気にあふれていた。午前一〇時一五分、会は始まった。全盲の高橋正秋君のピアノ伴奏に合わせて讃美歌が歌われた。彼らが歌う讃美歌は力に満ちた喜びにあふれていた。心の底から歌われる賛美は日本のどこの教会にもない独特のものだった。私は彼らの雰囲気から神によって救われている視覚障害者の群れを見る思いがした。私は新約聖書、ヨハネによる福音書第九章一―三節を通して、キリストにある自分たちの歩みを語った。聴衆は、私の一言一言に反応して、未だかつて経験したことのない乗り乗りと多くの園生が挨拶にきた。

今年の一〇月二十九日、再び光の家を訪ね一年間を過ごしたアメリカの体験を話した。私たちのごひいきチーム、北海道日本ハムファイターズの日本一を祝って新庄グッツのバットとボールを持参したところ、そのグッツを見ようと集まってきた。彼らの熱気は大変なものだった。光の家を訪ねると私は彼らとの強い連帯感を覚える。今度、訪問する時には、本物のバットを持つていくことを誓って光の家を後にした。本当に爽やかな体験だった。



更生施設での入所生活というどんなイメージをもたれますか？身体障害者更生施設、新生園は、訓練施設である一方で、長期間に渡る生活の場としての役割も担っています。新生園では、盲重複障害者の場合は基本的に生活習慣（食べる・着る・

各施設のトピックス

身体障害者更生施設 光の家新生園

アットホームな雰囲気での生活支援

排泄等）の確立や集団生活上のルール、一般常識的なことまで含めた人間形成の面も自立に向けて必要な力であると考えて支援に取組んでいます。そのためには昼間の訓練以上に、生活全体をカバーした支援が必要です。

園生の多くは盲学校時代から寄宿舎生活を過ごしてきた人が多く、入所前は身の周りのことは人任せが多かったという方も少なくありません。「誰もが普通に体験する事」を体験せずには育ち、多くの場面で介助を必要としてきた園生達に対し、生活面での支援として多くの処遇メニューを実践しています。

例えば入浴指導では入浴する手順を指導し、自主的に準備から後始末まで行う事を目標とし

身体障害者授産施設 光の家栄光園 人との出会いを大切に

て清潔面の自覚を促します。食事場面ではマナーや偏食の是正を促して健康の増進を図ると共に、家庭的な雰囲気の中で食事を楽しむということを大切に考えています。その一方で食事前後のお茶入れや食器洗い、床掃除等を当番制で行う事で、ただ食事を提供するだけでなく皆のために自分が働くというシステムを作っています。他にも、自分の部屋の掃除や整理整頓など、一般の生活では当たり前のことをできる範囲で行うように支援しています。生活支援としては決して効率の良い形ではありませんが、職員の介助ではなく園生の自立に向けた支援を継続して提供するのが、更生施設の生活面サービスだと考える所以です。日中の訓練後のくつろぎの場であり一方で自立支援の実践の場である生活支援が、園生にとって張りのある生活の場であればと願っています。

(新生園訓練課主任 関口 仁朗)



今年も栄光園では、様々な場所での秋の外部販売を行ないました。実際に園生と職員とで現地へ赴き、幼稚園や中学校の文化祭、日野産業祭にも参加しました。クリスマスカードは、毎年新しく製作していることと、定期的なこともあり今回も好評でした。外部販売では、実際に現地でお客様にふれあい、貴重な意見をいただいています。この

意見は、よりよい製品を作っていく上でいつも参考にしています。その他に大学の文化祭などでは、学生の皆さんにお願いする委託販売も行ないました。その中で人との出会いの大切さを実感した恵泉女学園大学の委託販売についてご紹介したいと思います。

恵泉女学園大学の学生との出会いは、光の家へ介護等体験研修で一週間の実習に来園、その中で一人の学生が、栄光園の作業に興味を持ち、何か協力したいということを申し出てくれました。彼女の特技はイラストを書くこと。まずは、それまでA4判のスケッチブックの表紙が数年間リニューアルされていなかったため、彼女に何か書いてもらえないか依頼したところ、快く引き受けてもらえました。

彼女の協力で、表紙は「かば」から可愛らしい「さる」へとリニューアルでき、多くの外部販売で好評となりました。

また彼女の熱心な活動のおかげで、恵泉女学園大学で委託販売が実現しました。彼女を中心とする販売メンバーが一生懸命販売を行っていたいたため、売り上げは他の委託販売よりもかなり多く売り上げました。

この恵泉女学園大学での外部販売で改めて感じたことは、どの外部販売も、今までの様々な出会いを大切にしながらこそ、現在も栄光園が販売を続けられることです。また今回の恵泉女学園大学の学生のように出会いをその場限りにするのではなく、その出会いを大切にしながら、続けていくことが、今回のような良い関係に発展していくのだと思います。今後も一つ一つの出会いを大切にしながら販売をしていきたいと思っています。

(栄光園授産課 浅井 紗和)

作業の取り組み



平成一八年度の神愛園の作業は、新しいメンバーが六名加わり少しずつ雰囲気が変わってきました。今年度から作業に加わったメンバーはいずれも神愛園の中でも比較的若いため、作業場内で交わされている会話も元気があります。しかし、若いことで元気がありあまってしまい、仕事に集中できないといった場合もあります。一方、年配の利用者には「作業がないとつまらない」と一日も欠かさず元気に車椅子で通ってくる七〇代の方や、「僕の定年はいつなんだろう」と言いながらも誰よりも早く作業場に来る八〇代の方があり、作業参加を生き甲斐と感じ、心から楽しんでいる様子が見て取れます。しかし、中にはそれまでは一度も仕事を休んだ事がなかった方が体調を崩し

てしまい、その後気持ちとは裏腹に参加ができない利用者や、以前と同じ仕事であっても正確な仕事をするのができなくなってきた利用者もいるのが現状です。光の家に入所してから毎日欠かさず通い続けている作業場は利用者一人一人にとって生き甲斐であるかけがえのない場所であるのだから、つくづくと感じさせられます。我々職員としては、いかに利用者にとって生き甲斐である作業を快適にそして楽しく安全に行えるようにするかが非常に大事な仕事となつてきます。また、個々の利用者の身体的・精神的状況に合わせて関わりを持ったり、対応することも大切です。



上では賃金を得る喜びも大きいと思います。自分たちの作品を販売し皆さんに買って頂き、使つて頂くことで作る意欲にも繋がっていきます。自分で稼いだ賃金で自分のおやつを買ったり、旅行に行った時にはお土産を買ったりとさまざまな使い方が見られています。

今後とも利用者にとって何が一番大切であるのかを考え、少しでも多くの楽しい時間を提供できるように努力していきたいと考えています。

(神愛園作業指導係 情野 直人)

法人施設役員

理事長・評議員

田中 亮治

常務理事・評議員

田中 ノゾミ

理事・評議員

相澤 忠一

小野 秀郎

篠坂 恵児

杉崎 友照

松本 閑二

監事

川又 義洋

評議員

石川 左門

岩島 清子

遠藤 文子

加藤 保武

佐川 寛治

藤下 三郎

(五十音順)

完成を待ち望んで



私はマッサージホームで仕事をするようになって、もう一六年になります。その間、特別な大きな変化も無く、毎日恵まれた生活をしてきました。

しかし、昨年は長い間一緒に働いた仲間が二人も退所し、また新しい人が入って来たりして環境の変化に戸惑ったりもしました。



そのような中、八月の下旬から自立支援センターの建設が始まりました。治療室でも患者さんから「今工事をしてるけど、何が建つんですか?」と聞かれ、「来年からマッサージホームが新しくなるんです。」そんなふうな会話が始まることが多くなりました。一六年間住んでいる今の建物にはとても愛着はあるのですが、やはり新しい所に移れるのは嬉しくて、みんなで三月の完成をととても楽しみにしています。工事の期間中も仕事や生活の環境を変えることなく、過ごさせて頂けることは本当に有難いです。

感謝の気持ちを忘れずに、これからも患者さんに喜んで頂けるように、一生懸命頑張っています。

(マッサージ師 三浦 由紀子)

家族の願い

東京光の家保護者会会長 小越 勤



家族の願いはひとつです。

我が子供が、身内が、「僕生まれてきて本当によかった」といえる人生を送れるように。

しかし、残念ながら、手許において教育、訓練し、自活への能力を身につけさせることは不可能です。

それ故に私どもは、専門家の集う「光の家」という愛に満ちた素晴らしい施設に家族をお願いしているのです。それでもまだ不安があります。私どもが年をとる、子供に対応できなくなったり、頼める身内がいるだろうか。このような時に出てきたのが

障害者自立支援法です。

聖域なき改革の一環としても余りにも性急過ぎます。従来から、福祉施設は後まわしにされ、財政逼迫のしわ寄せをものに受けてきました。先人達の血のにじむ努力、啓蒙活動によってようやく今日があります。

昨年、四月から一部施行されているこの法律は問題が山積みです。利用者の原則一割負担は社会問題化し、三年後の見直しまで待てずに早や本年度から補正予算を組む始末です。支援費給付の日割計算、障害認定区分(今のままでは入所できなくなる利用者がでてくる)、入所年数の制限、昼と夜の区分の問題など私どもは施設に対して率直に不安や要望を伝えると同時に、物心両面の支援を是非していきたくと考えております。

利用者の声

二〇〇七年の抱負

生活訓練を頑張ります！

光の家新生園 氏橋 優一



新生園に入所して六年目になります。僕は今、生活訓練で部屋の掃除機掛けの練習をしています。今年度中には、上手にお部屋の掃除ができるようになりたいです。あとは、コーヒーが大好きなので一人でコーヒーがつけれるようにお湯沸しの仕方やコーヒーの入れ方を練習したいです。また、来年度は演劇クラブに入りたいです。発声練習をして上手にしっかりと声を出せるようになりたいからです。今年もがんばります。

健康に感謝して頑張ります！

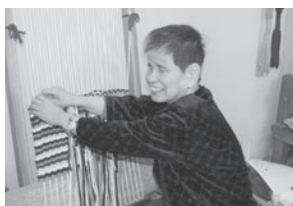
光の家栄光園 堀江 礼子



昨年は栄光園に来て、二〇年勤続表彰を頂きました。最近では上製ノートの寒冷紗を貼る仕事をしています。手がのりだらけになり、荒れてしまいましたが一緒に働いている仲間とは仲もよく、ノートは共同作品と思って頑張っています。また昨年は六月に水疱瘡に罹って大変な思いをしました。早く布団から起きて作業に行きたい、皆と会いたいと心から思いました。日頃の健康に感謝して今年も健康で作業ができるように頑張ります。

『私の決意』

光の家神愛園 本多 恵美子



私は生まれてすぐに失明し、昭和五一年四月に光の家に入所し今年で三一年になります。光の家に来るまでは家の中に閉じこもり暗く過ぐす時期もありました。しかし、私は光の家に來てからが本当の人生の始まりだと思っています。旅行に行けたことや、多くの仲間に出会えたこと等多くの幸せを得ることが出来ました。逆に辛い時もありました。しかし、神様を信じて、また助けられながら今まで生きてくることが出来ました。これからも、少しでもみんなのお役に立ち、また大好きな作業を続けていきたいと思っています。

おめでとーございます

光の家神愛園 岡本副園長
厚生労働大臣賞受賞



この度、思いもよらず、このような賞を戴き感謝申し上げます。

幾重もの障害を「神に与えられた人生」と肯定し、その生涯をイエスキリストの愛に導かれて生きる園生方の傍らで、二〇年以上も共に過ごさせて頂きました。言い尽くせない思いで一杯です。有難うございました。
(光の家神愛園副園長 岡本 一美)

愛のサウンドフェスティバル

響け天使の歌声

一月二五日(土)、今年も正秋バンドチャリティーコンサート・愛のサウンドフェスティバルが、日野市民会館大ホールにて盛大に行なわれました。二時の開演には、ほぼ満席の状態となり、お客様の期待と応援の拍手のなか、幕が上がりました。



第一部最初の曲はバンドのメンバー紹介を兼ねた「素敵な仲間われらナイン」。初めての

お客様も、この曲を聴けば、メンバーの名前と特徴がすぐに分かります。高田敏江さんのテンポの良い司会で、曲は青春の歌へと進んでいきます。「神田川」では、高橋繁さんが初めてアコースティックギターを披露しました。少し恥ずかしそうな繁さんの後には、真紅の衣装を身にしたとい、正秋バンド初の女性ボーカル、真山直美さんが登場！「ルージュの伝言」をはつらつとした声で歌い上げました。

そして今回の見所である第二部。透き通るような教会の鐘の音が会場に響きわたり、舞台には、約六〇名の聖歌隊が胸を張って立っていました。白いブラウスに黒いロングスカート、左の胸にはカトレアの生花で作ったコサージュが光っています。クリスマスを祝う讃美歌を三曲、そして正秋バンドとジョイントで「Oh happy day」を歌いました。会場からも手拍子が湧き、音楽を通して、そこにいるみんなの気持ちがひとつになった瞬間でした。最後は正秋バンドが「ありがとう」を熱唱し、コンサートは幕を閉じたのです。

今回のテーマは「愛」。光の家と恵泉女学園大学の聖歌隊が初めて大舞台上に立ち、正秋バンドと共に創り上げたコンサートとなりました。

光の家の聖歌隊の出演が決まった時には、嬉しい反面、不安もありました。今回のような大舞台は初めてなので、大丈夫かしらと心配だったのです。そんな折に、毎年実習にきている恵泉女学園大学の学生さんを通じて、同大学の聖歌隊の皆さんが、力を貸してくださるということになったのです。当日に向け、学生さんと時間を調整し、合同練習も何度か行ないました。プライベートの時間を割いて、練



(栄光園授産課 室屋 安希)

正秋バンド「コンサート」を聴いて

岡村 多美子

私は今、年金暮らしですが、三十八年間、府中市の保育士として働いてきました。

「子供は見ることでは八〇%学ば」 「決してお説教では育たない」ということを肝に銘じてきました。また嫉妬は新しいものにしかつけないように、乳幼児期に生活習慣を身につけたり、善悪の判断をきちんと教えてあげれば思春期にいろいろあっても、最終的に豊かな人間に育っていくと信じています。

三重苦を背負った正秋さんをこれまでに成長させたお母さんや光の家の職員の努力に頭が下がりました。また光のない世界がどんなものか想像がつきませんが、本人の強い精神とエネルギーとたゆまぬ努力や心の豊かさに胸うたれました。



日本社会事業大学の先輩の武藤百合子さんから、正秋バンド・チャリティーコンサートを誘われた時、ちょうど青梅市にある聖明園の本間昭雄先生の施設見学をさせて頂いた直後、だったので是非、参加したいと思いましたが。光の家の常務理事の田中のぞみさんも社事大の先輩と聞

き、多摩地域にも福祉の現場で高齢になっても頑張っている人が沢山いることに感銘し後輩として誇りに思いました。いつの時代も福祉の充実を願っている対象者の方々や現場で働いている人達のあつい思いによって支えられていることを実感しました。

司会をしてらした高田敏江さんも舞台女優なので、声にはりがあり、会場全体にきれいな声がかかって、とても素敵でした。正秋バンドの創作曲もすてきで正秋さんの音楽を愛する心が良くわかりました。

かぐや姫、井上陽水、アリス等のヒット曲もなつかしいものばかりで「遠くで汽笛をききながら」は私の人生と重ねて涙が止まらなくなりました。

恵泉女学園大学聖歌隊と光の家の聖歌隊の方々の讃美歌メドレーでは、どの曲もハミングできるほど知っているものが多く、心が洗われるような気持ちになりました。

コンサート収益を日野市社会福祉協議会と新潟中越地震の地域復興義援金として寄贈していらしたことも、すごいことだと思います。

心なごむ楽しいひとときを過ごさせて頂きどうもありがとうございました。



日野社協 福島会長に寄付金を贈呈する田中理事長

新潟中越地震の地域復興義援金に対してのお礼のお手紙が届きました。

駆け出しの朗読者の思い

いとでんわ 高尾 正子



私達は三人で、毎月第一、第三水曜日に神愛園と新生園で一時間ずつ本を読ませて頂いています。各施設、年齢層の違いがある為、本選びには随分時間が掛かっています。私たちが面白いと思ったものを読んでいますが、これは押し付けではないだろうか。今まで参加していた方が欠席とお聞きすると、病気がろうか、それとも読む作品が面

白くないのだろうか、光の家に朗読を始めて約三年半とまだ日も浅く迷い迷いの日々です。

先日は私の活動の一つでもある日野市民会館に於ける話劇の公演に新生園の方々が観劇に来て下さいました。礼儀正しく熱心な素晴らしい観客でした。

又、光の家の会報を録音させて頂いています。施設解体論の紙面に接しますと、光の家で落ち着いて明るく生活している方々を目の前にし、福祉の社会整備ができていない現状ではとんでもない意見だということが良く分かります。

月二回、本を通して同じ時間を共有することしかできませんが、今後とも、人間同士のお付き合いができることを願っています。

プロ野球選手のスウィングに大興奮!



熱弁をふるっている佐々木信也さん

今年も佐々木信也さんが光の家に来園しました。佐々木さんと言ったら、プロ野球ニュースというところで色々な野球の話をしてくれました。特に今回は、小笠原選手や小久保選手のバットスウィングの音を録音し、その迫力ある音を聞かせてくれるなど、視覚障害者にも楽しめる盛りだくさんの内容でした。

寄付者名簿

平成一八年二月一六日
二月一五日

久木田薫チャリティコンサート
実行委員会様
(日野市社会福祉協議会を通して)

東京電力(株)八王子支社生活営業グループ様
点字図書・テープ 一〇万円
三十四点

米田功様
米四〇kg、梨一八個、柿九個、
ジュース二四本、音楽CD二枚、お菓子三箱

品田光義様
梅干 五kg

遠藤宏様
手作りブックカバー 五〇枚

山崎順子様
梨 二一箱

石川雅也様
年賀ハガキ 一〇〇枚
りんご 六四箱

佐藤しげ井様
柿 七二箱

小林治子様
木材 九〇点

高砂弥生様
かぼちゃ 一〇kg

佐々木信也様
りんご 二一八箱

浅石常勝様
米二七kg、りんご七箱

早川伴子様
柿 三六箱

鳥本敏郎様
柿 六〇箱

宮田容子様
バナナ 一五kg

城山鶏園 加藤泰文様
(モクダイ電
器様を通して) 鶏卵 一八〇個

山田善二郎様
レモン 一〇kg

金子勝江様
りんご 五二箱

錦戸将斗様
みかん 九kg

杉山保次様
鮭 九kg

赤津晃子様
あられ二〇袋、ビスケット 一六〇袋

小倉知香子様
りんご 三二箱

佐藤公生様
みかん 三〇kg

※紙面の写真は、すべてご本人の許可を得て掲載させて頂きました。

200年 東京光の家 クリスマス

二〇〇六年十二月一九日、東京光の家が最も大切にしている行事の一つである、クリスマスが盛大に行われました。

第一部「礼拝」は石川左門先生による「生きる意味を求めて」と題した記念講演でした。一日、出来る限りのことに全力投球するーという、生に対して向き合うことの難しさと大切さが身に沁みるお話でした。



第一部礼拝 記念講演をされる石川左門先生

第二部「祝会」の幕開けは、聖歌隊による発表。クリスマス讃美歌など、心に響く美しい歌声を三曲、披露しました。又、

栄光園有志による劇「僕たちの可能性」授産施設誕生の物語〜は、約三五年前に授産作業を始めた経緯を描いた物語です。人間として働くということの大切さの基本理念と仕事に対する思いを込めた内容で、その熱演に会場を魅了した一時でした。

第三部「会食」は、八会場に分かれて、心のこもった手作り料理（新作は、赤と緑の二種類のソースのかかったポテトムース）を味わいながら、主の御降誕を祝しました。今年も感謝に包まれた温かいクリスマスは、一人ひとりの心に幸せを残して幕を閉じました。

（合同行事委員 保立 愛）



第三部会食
キャンドルサービスのもと讃美歌 109 番を歌う



第二部祝会 栄光園による演劇
「僕たちの可能性 ～授産施設誕生の物語～」

あとがき

○厳しい寒さが到来。しかし、冬の後には春が待っています。この法則は、永遠に変わることがなく、毎年のように厳冬の後には春、酷暑の夏後に涼風の秋が続くのです。これは人間の力によるものでもなく、人間の科学や知恵によるものでもありません。人間をはるかに超えたサムシング・グレート（偉大な存在）の意志の力によるものなのです。

○会報新年号をお届けいたします。今年も変わらぬご指導・鞭撻を乞う次第です。皆様にとって佳き年でありますように。

（N・T）

※今年度の会報委員は

左記のメンバーです。

編集委員長 田中ノゾミ
編集員 関口仁朗 岩崎幸一
室屋安希 榎本隼人

今後ともよろしくお願い致します。

発行 〒一九一〇〇六五
東京都日野市旭が丘一七二七
社会福祉法人 東京光の家
電話 〇四二（五八）二三四〇
FAX 〇四二（五八）九五六八